

# 第3期中期目標の総括

## 1 重点目標 活動方針

- ◆活動方針 1 地域の文化遺産の収集と継承..... 1
- ◆活動方針 2 最新の研究による新たな資料価値の発見 ..... 3
- ◆活動方針 3 来るたびに発見がある展示・講座 ..... 4
- ◆活動方針 4 楽しめて出会いのある場の創出..... 6
- ◆活動方針 5 利用者との協働 ..... 8
- ◆活動方針 6 博物館情報の公開と発信 ..... 10
- ◆活動方針 7 地域連携とネットワークの拠点..... 11
- ◆活動方針 8 震災遺産の保全・活用による東日本大震災の共有と継承..... 12
- ◆活動方針 9 新たな博物館の役割・機能の創出 ..... 13
- ◆活動方針 10 管理運営 ..... 14

## 2 重点目標の成果と課題

### ◆活動方針1 地域の文化遺産の収集と継承

重点目標①	実現方策
<b>検索が楽しめるデータベースの構築と公開方法の改善</b>	現データベースを基盤に、新たにテーマ型データベースを構築し、知的好奇心を喚起させるアクセスしやすい収蔵資料情報整備し、試行する。

〈目標設定の背景〉

現在の公開DBは、博物館関係者や研究者が資料目録として使用するにはシンプルな検索システムであるが、一般のHP閲覧者にはやや敷居が高いと思われる。DB利用者のすそ野を拡大するため、検索が「楽しめる」DBを構築し、博物館資料の魅力を発信する。

【成果】今期当初、当館では公式 Web サイトの抜本的更新があり、コンテンツの取捨選択と新たな形での資料情報の発信・公開が求められた。このため、旧来の固定的ページ構成を廃し、先行公開された「収蔵資料情報データベース（以下、DB）」を改良、より洗練された形でのテーマ型DBの整備を進めた。今期、各分野の「学芸員のおすすめ資料」選定を経て試行的公開に至

ったことは、デジタルミュージアム推進の一つの成果である。

【課題】上記テーマ型DBは試行段階ではアクセス数やコンテンツ量の面で課題が残った。他方、広報普及事業とも関わるが、今期の大半を占めたコロナ禍は、図らずも各館のデジタルミュージアムの取り組みを促進し、当館も YouTube・SNS・個人端末での情報配信等、異なる利用者層へ多様な媒体での資料情報公開の契機になった。改正博物館法を踏まえ、今後も資料のデジタルアーカイブ化を推進してデータベースの充実を進め、コンテンツの利活用の機会を拡大していく必要がある。

重点目標②	実現方策
図書利用環境の整備	図書配架スペースを確保し、図書利用環境を整備する。 図書データベースを一般公開し、運用ルールを策定した上で一般来館者の図書利用を試行する。

〈目標設定の背景〉

博物館活動適切化の一環として平成29年度に図書室・情報処理室の環境整備を実施した。さらなる環境整備のため、ひっ迫している図書配架スペースの課題を解決し、スムーズな図書閲覧環境を回復させるとともに、図書利用対象者を拡大させ来館者の学習ニーズに応える。

【成果】令和2～3年度にかけて、書架の整理作業を集中的かつ大規模に実施し、山積する未配架図書や書庫の狭隘化といった問題について、状況を大幅に改善することができた。また、県内の他の図書館に比して当館図書室の持つ蔵書（報告書等）の強みを活かし、収蔵図書データベースの公開・図書の一般利用の門戸を開いたことは、より深く・より広く学びうる機会を多くの人に提供する取り組みとして、今後も推進されるべき成果である。

【課題】一般来館者の図書利用を本格的に実施するためには、より一層の周知や、県内図書館横断検索への参加等により利便性を高める施策が望まれる。これにより利用実績を上げながら図書の出納や閲覧対応等にあたる人的な態勢の強化したい。

重点目標③	実現方策
資料の安全な保存	適切な情報取得と情報共有をもとに、適正な保存環境を維持する体制を確立する。保存環境モニタリングの情報取得方法・内部共有システムをバージョンアップするとともに適正に運用する。

〈目標設定の背景〉

近年、空気環境(化学汚染物質)の清浄化技術に関する研究開発が進められており、指針が整備されつつある。当館が採用している監視方法では実態を正確に把握することが不十分な上、現状の空調設備と運

用では空気清浄化を実現できない可能性がある。第1期-第2期中期目標では、生物被害防除(IPM)に重点を置いたので、この成果を継承しつつ、第3期中期目標では、空気環境の清浄化に重点を置きたい。

【成果】今期は特に展示・収蔵環境のリスクアセスメントを推進した。環境調査・温湿度モニタリング・収蔵庫の定期清掃等 IPM (Integrated Pest Management) を継続的に実施した。これにより定期的調査→分析→情報共有→改善策の実施→定期的調査の継続 というサイクルを確立した。開館以来40年近くを経て、老朽化による不具合は館内各所に生じつつあり、異常の早期発見、より適切な環境整備のための具体的な対策につなげられたことは大きな成果である。

【課題】温湿度モニタリングについては、現在もアナログな温湿度記録計を多く使用している状況にある。デジタル化が必要であり、データロガーの台数増(追加購入)と合わせ、モニタリングのネットワーク化によりリアルタイムの把握と迅速な対応が可能な体制を構築したい。

#### ◆活動方針2 最新の研究による新たな資料価値の発見

重点目標④	実現方策
多様な連携による新たな研究活動	地域の歴史・文化や自然遺産に関する学術研究を推進するため、多角的な視点と最新の研究手法が共有される新しい研究プロジェクトを自治体や大学・研究機関などの外部組織と立ち上げる。その中で主体的かつ連携を強化する役割を果たして効果的な研究活動を実践する。とくに新たに博物館資料に位置付けられた震災遺産の調査研究を推進し、博物館活動における災害史領域の普遍化を目指す。

〈目標設定の背景〉

当館学芸員はその専門性による地域の研究課題を各々推進している。

研究は博物館で完結する研究、自治体との連携、大学や研究機関の特定研究課題に参画するものなどがあり研究規模や枠組みが多様である。

この中で、多角的な研究視点や最新の研究方法に触れることができ、学際的な新たな研究の枠組みが更新される共同研究に参画する。その結果、研究成果とともに共同研究の枠組みが博物館にフィードバックされ館の研究基盤の強化につながることを期待される。

また新たな部門として立ち上げた災害史については震災遺産の調査研究を強化し、地域博物館における研究の地平を拓いていく。

【成果】連携した共同研究の推進では、大学や博物館等と連携した各種研究プログラムに毎年参

画し、学会発表や公開シンポジウム及び報告書等で研究成果を発表した。特に自然分野では国内外諸機関との協業による研究により、卓越した研究成果を挙げた。また地元会津大学とソフトウェアを開発する取り組みも行った。外部の研究費助成については、科研費の奨励研究・基盤研究(C)・若手研究で採択実績があった。

【課題】研究費は僅かながらも増加傾向にあるが、学芸員一人当たりでは小規模であることに変わりなく、研究基盤は依然として貧弱な状況にある。引き続き、外部資金に積極的に応募しつつ、科研費においては中型・大型の助成金獲得のための環境整備が必要である。

### ◆活動方針3 来るたびに発見がある展示・講座

重点目標⑤	実現方策
何度でも足を運びたい展示づくり	常設展の展示替えや魅力ある企画展の開催により、常に新しい発見のある展示室を構築し、リピーターの増加を目指す。

〈目標設定の背景〉

展示観覧者全体の増減は、毎回の企画展の内容に大きく左右される傾向がある。できるだけ魅力的な企画展を準備するとともに、常設展を含めて観覧者数の底上げをする必要がある。学校団体への取り組み以外に、新たに導入した年間パスポート等を活用しながら、何度も来館してもらえる工夫をしてリピーターを増やす取り組みが必要である。

【成果】企画展観覧料で常設展示観覧できることもあり、企画展の内容と関連したテーマ展やポイント展を実施することで館内の一体性と連動性を高め、本県の歴史・文化・自然の魅力に触れる機会を増やすとともに、研究成果を速報的に紹介するポイント展も増加した。また文化観光事業により展示効果を高める施設・設備の改修、分野別展示室の大幅なりニューアルや「三の丸アベニュー」の整備など新しいコンテンツの導入など来館者満足度につながる基盤整備を実施した。

コロナ禍において、観覧者に直接解説することができないため、対応として中テーマセ七で解説パネルを増設した。またそれらをもとにインバウンド対応の多言語化を進め、デジタルサイネージにて表示している。多言語対応では、会津若松市国際交流協会や会津大学の留学生などの協力を得た。

展示室にWi-Fiを新設したことにより、Webを活用した展示観覧(R5年度秋企画展)など実施した。

【課題】デジタルサイネージで表示している多言語については、おおむね好評であるが、さらなる多言語(英語翻訳)を求める声はアンケートから読み取ることができる。

文化観光推進事業で整備したゲートウェイ展示等を外部と連携しながら活用し相互に魅力を発信できる仕組みを構築する必要がある。

重点目標⑥	実現方策
博物館の魅力が詰まった新しいスタイルの講座の開催	展示と有機的にリンクしたり、テーマ性をもった多様な魅力ある講座を開発・実施する。

〈目標設定の背景〉

これまで講座は各分野の判断でそれぞれ企画・運営してきた側面が強く、分野の個性が出る反面、館全体で見た場合には不統一感もあった。今後はアレンジを加え、展示がより楽しめる講座や、最新の研究を分かりやすく伝える講座、テーマ性があり分野横断的な総合講座などを開発・実施し、統一的な広報にもつなげたい。

【成果】「ポイント展ミニ解説会」を開催することで、常設展の魅力発信につなげた。ポイント展は小規模な展示だが学芸員の日頃の研究・資料収集の成果を速報的に発表する場でもあり、館と学芸員の活動を伝える重要なコンテンツである。特に、学芸員が直接解説を行うことでリピーターや年間パスポート保持者の満足度を高めることにもつながった。

また、期間中に新型コロナウイルス感染症の拡大があり、対面での講座やイベントを中止せざるを得ない状況があったが、公式 YouTube で視聴できる新しいスタイルの講座開催と公開につなげることができた。加えて、新たに始まった「三の丸からプロジェクト」を軸にした分野横断型の連続講座「三の丸から講座」を開催することで、複数の分野が組むことによる話題の広がりや内容の充実を得ることができた。

【課題】「ポイント展ミニ解説会」は平日の来館者増を目指し、平日に来館できる近隣在住のリピーターを潜在的な対象としていた。一方で、やはり土日祝日に比べると参加者数が少ないため、担当学芸員からは来館者の多い休日に開催したいという意見も寄せられた。来館者と気軽に会話しながら解説をするという当初目指したスタイルとズレが生じたことで、継続が難しくなった面もあった。

また、行事実施数が多いこと、分野ごとに当該年度の事業計画があること、テーマ設定の難しさなどが、分野横断型講座を定期的で開催するためのハードルになっている。

重点目標⑦	実現方策
新しい展示ストーリーの検討	将来の展示室改修に備えて、新しい常設展の展示ストーリーを検討する。新設館など最新の情報を収集し、館

	外から意見を聴取する機会を設定し、常に最新の構想を準備しておく。
--	----------------------------------

〈目標設定の背景〉

・大規模な予算を伴うリニューアルの見通しが立たない状況の中でも、将来の展示室改修などを想定した準備を進めておく必要がある。展示の手法や技術は日々進歩しているため、常に最新の情報を収集しておくようにしながら、新しい展示ストーリーには利用者の視点も不可欠であり、館外からの意見を聴取する必要がある。

【成果】当初の2年間は、新たな展示ストーリーを構築するために、博物館利用指導者研修会参加者や会津若松市国際交流協会を来館者モニターとして展示観覧後に外国語表示など今後の展示の在り方について意見交換を行った。また会津大学と連携し「鑑賞アプリ」の試験導入やモニタリングセンサー等を試験的に設置し、来館者の観覧動線の把握や展示観覧の印象を把握し展示構成にフィードバックできる情報技術の検討も行った。

3年目からは、文化観光事業への参画に伴い、会津文化観光の3つの文化エリア周遊のゲートウェイとなる展示ストーリーを常設展示空間のバッファゾーンである展示ロビーにコア展示ゾーンとなる「三の丸アベニュー」として具体化した。

【課題】新しい展示ストーリーの検討は「三の丸アベニュー」構想を実現させたが、常設展示の大部分はリニューアルに向けての動きはなく、文化観光事業による多言語化やデジタルサイネージの導入、観覧支援情報ビューワーの装備等はあるものの館全体の常設展示ストーリーの見直しを含めた検討は進展が鈍いといえる。総合展示室における震災遺産の常設展示化などの検討や具体化については一定の進捗はあったが、今後も予算措置が伴わない中でも着実に県民のニーズに応じた対応をしていかねばならない。

#### ◆活動方針4 楽しめて出会いのある場の創出

重点目標⑧	実現方策
展示室以外の空間の有効活用	展示室以外の空間の活用案の検討と試行により、各フロアの魅力を引き出した、有機的な空間活用を実現する。来館者が行きたい、過ごしたいミュージアムならではの空間をつくり、運営する。

〈目標設定の背景〉

これまで展示室以外の空間をトータルで捉え、機能を再検討することは十分に行われてこなかった。展示室以外の空間の機能・役割を再設定することにより、利用者の来館メリットを増加させることが可能である。また当館のフロントにあたり来館者が当館に抱くイメージに影響するフロアであることから、各空間の有機的

なデザインは当館のイメージ向上にも有効である。

【成果】旧体験学習室、ティールームについて、班内協議、多様な立場の外部の方とのワークショップを経て活用案をまとめ、令和3年から三の丸からプロジェクトにより、雪国ものづくり広場「なんだべや」・雪国ものづくり食堂「つきない」として整備を開始し、乳幼児を連れた家族、障がいのある方も居心地よく楽しめる空間とした。また、内装に会津のものづくりをふんだんに取り入れることで、会津の文化に触れられるミュージアムならではの空間とした。

前庭・雁木下では令和3年より雪国ものづくりマルシェを開催し、ものづくりをテーマに「なんだべや」「つきない」と屋外を有機的につなぎ、会津の文化を発信する場とした。

他団体との連携協働により、屋外も含めた無料空間を未就学児向けプログラムや多様な体験活動の場として運用した。リピーターも増え、来館者にとって魅力ある空間を創出できたと言える。

【課題】「なんだべや」「つきない」を、ものづくりを伝える空間としてリニューアルしたが、その内容や魅力を十分に発信できているとは言えず、HP、SNS等を通して情報発信を行っていく必要がある。今後は協働団体の公募・登録制度の確立とともに、無料空間を協働団体の活動拠点として運用する仕組みを構築し、さらなる有機的な空間活用により、開かれた場としての魅力を高めていく必要がある。

重点目標⑨	実現方策
多様な利用者層に対応したプログラムの実施	人が出会い、学び合い、表現できる場をつくる。年度ごとに対象を定めて効果的なプログラムを計画・実施する。

〈目標設定の背景〉

さまざまな立場の方々がより利用しやすい博物館環境をつくるため、これまで行き届かなかった利用者層を対象としたプログラムを計画・実施し、定着させる。

【成果】第3期中期目標以前は障がい者等多様な利用者層に対応したプログラムを実施できていなかったが、文化庁から助成を受けたライフミュージアムネットワーク事業、ポリフォニックミュージアム事業などを活用し、この5年間で多様な層に応じたプログラムを充実することができた。具体的にはこども園、支援学校、老人福祉施設、障がい者支援団体、適応指導教室等との連携により、未就学児、障がいのある児童生徒、高齢者、視聴覚障がいのある方、不登校等困難を抱えたこどもに向けたプログラム等を開始した。先進事例や専門家からの学びと実践、アーティストや芸能団体等との協働を通して、地域の文化や自然、人に出会うプログラムとして試行しながら内容の充実、定着をはかった。

さらに文化観光事業で「触れる展示BOX」や「さわって観ようてんじカード」など、視覚障がい者向けの観覧支援システムを開発し、運用を通して効果を検証した。

【課題】最終年には、会津に在住する海外の方とのプログラムも試行し、ニーズを把握したが、本格的な実施には至らなかった。今後は関係団体との連携を図りながら、さらなる多文化交流プログラムを展開していきたい。

多様な利用者に向けたプログラムの開発、実施は端緒についたばかりであり、この5年間の学びと実践を活かしながら、関係団体で知見やノウハウを共有し、博物館が持つ地域を知るための豊富な素材を活かしたプログラムを展開していく。

#### ◆活動方針5 利用者との協働

重点目標⑩	実現方策
ボランティアとの協働	ボランティアに関する研修等を受けた館職員が窓口となり、受入体制を整えて、ボランティアを募集する。また博物館とボランティアが協働しつつ、新しい活動メニューを考案し、試行する。

〈目標設定の背景〉

現在、全国の様々な博物館ではボランティアの導入が進み、体験学習やイベントの補佐などをボランティアが担っている場合も少なくない。そこで当館においても資料整理に限定せずにボランティアを募集し、より多くの人に生涯学習の場を提供することとしたい。

【成果】第3期中期目標設定当初、資料整理に加え、館内ガイドやイベント運営に携わることなども含めたボランティアを想定し、目標を立てていた。令和3年度にボランティアのあり方について協議を行うなかで、協働による新たな枠組みでの事業内容と差別化を図るために、ボランティアについては現行の資料整理ボランティアの性格を尊重し、その活動を支援する方向性をとることとした。

博物館友の会古文書愛好会メンバーに限っていた歴史分野の資料整理ボランティアは、令和4年度から一般の参加を試行的に受け入れるなど、分野それぞれに適した募集形態の検討を行った。

【課題】各分野の資料整理ボランティアに適した募集形態や活動形態について検討を行ったが、いまだ十分に整理できていないため、今後も引き続き、各分野の資料整理ボランティアと協働し、各分野に適した募集形態を検討していく。また、資料整理ボランティアの学びの機会の充実や博物館との連携についてもヒアリングを行いながら検討を継続する。

重点目標⑪	実現方策
利用者の自主的な文化活動支援	博物館を活用した自主的な活動の受け皿をつくり、利用者の学ぶ意欲を促進する。

〈目標設定の背景〉

博物館友の会のサークルとして活動している化石鉱物探検隊・古文書愛好会のように、博物館という場を存分に活用し、自主的に学習を深める人々を支援する仕組みを作り、博物館ならではの方法で地域の文化活動を活性化したい。

【成果】友の会サークルは既存サークルに加え、令和3年度に新たに「仏像に親しむ会」「考古学倶楽部」が立ち上がり、担当の学芸員の伴走のもと活発な活動を展開している。令和5年度には、サークル内から他分野サークルと連携したワークショップの提案がなされるなど、「みんなで作るイベント」等との協働の可能性も見出された。

【課題】現状、友の会会員がサークルに参加できるルールとなっており、サークル活動への参加が友の会入会の主要な目的ともなっている。一方で、友の会自体は高齢化が進み、運営に困難も生じている。今後は継続して友の会サークル活動を支援するとともに、友の会会員に限らないサークルの運営など、友の会自体のあり方とともに検討していく必要がある。

重点目標⑫	実現方策
協働による新たな事業運営の枠組みの構築	利用者との協働による事業運営体制について開かれた検討と試行を行い、共催、後援事業などを含む協働の多様な枠組みを設け、協働の層を厚くする。

〈目標設定の背景〉

これまで利用者との協働による事業運営体制について十分に検討されてこなかった。利用者の立場に立った協働の枠組みの検討は、使命実現のための必須事項の一つである。館内外の意見を広く共有する場を設け、協働のあり方を利用者とともに検討しながら、多様な枠組みを設けることで、協働の層を厚くしたい。

【成果】館内外との議論を重ね、外部の団体との協働による事業運営の枠組みを検討した。令和4年度には試行的に他団体との協働による事業運営を開始し、運営協議会において協働団体・個人を公募により募る方向性について共有した。令和4年度から令和5年度には協働事業のあり方について、協働団体と丁寧に関わり、**「みんなで作るイベント」**として各イベントを実施した。実施後は各団体と振り返りを行い、成果や課題について検証を重ね、関係性の構築を行うことができた。

イベントの他、会津支援学校との学習プログラムやゲストティーチャーに協働団体**等**として参加いただくなど、イベントに限定しない協働のあり方も試行できた。

【課題】従来の「依頼」という形から「協働」による事業運営にシフトしたことにより、軋轢が生じたこともあったが、その都度、協議しながら事業を進めてきた。今後も引き続き丁寧な関係性構築が必要となる。さらに、ニーズの把握と掘り起こしと併せ協働団体の公募制度を構築して協働体制を強化し、多様な文化的プログラムやイベントを提供していきたい。それにより来場者の満足度を向上させるとともに、各団体の活動の周知や継承、自己実現につなげることで、来場者・協働団体双方にとって実りのある活動としていきたい。

#### ◆活動方針 6 博物館情報の公開と発信

重点目標⑬	実現方策
情報の効果的な周知	広報戦略の立案に基づき、当館発行の印刷物・WebおよびSNS・マスコミ・行政の広報媒体等、ツールの特徴を活かした広報により情報周知の徹底を図る。

〈目標設定の背景〉

広報力の弱さは長年、内外から指摘を受けている事項である。近年、新たな広報ツールの活用や他団体との連携による広報ルートの開拓を進めているが、それらを効果的に機能させるために、広報戦略の立案とそれにもとづく広報が必要である。

【成果】X (旧 Twitter)、Facebook について、それぞれの特性を把握、投稿内容によって使い分けることで、効果的な情報の周知につなげることができた。大きな反響を得た投稿もあり、従来の HP のみでは得られなかった SNS の拡散力やユーザーの反応を感じるとともに、新たなファン層の獲得にもつながった。加えて、SNS に反応があった後にホームページの閲覧数が伸びるなど、相互に関連性のあることがわかった。

また、企画展だけではなく、研究成果の公表や三の丸からプロジェクトの成果といった館の事業についても報道各社への情報提供を頻繁に行うことで、良好な関係性を築くことができた。

【課題】SNS についてはこの5年間で新たに Instagram が登場、人気を集めるといった隆盛があった。また教育庁の note など新しい媒体も現れており、マンパワーの問題もあり広報ツールを増やし続けることができない中で、県公式 SNS 活用も含め当館にとって最も効果的な広報ツールを検討しつづける必要が生じている。予算としても大きな広報費がついているわけではないため、基本的には自前のツールを使用するしかない中で、広報活動をさらに展開していくという面においては限界も感じられる。

重点目標⑭	実現方策
親しみやすさと認知度の向上	広報物および掲示物、サインのデザイン精度を上げ、イメージの統一感を図る。様々な視点による多様な博物館紹介を試み、親しみやすさの向上を図る。

〈目標設定の背景〉

当館の認知度は、開館から 30 数年を経ても十分とは言えない。当館を知らない、訪れたことのない層へのアプローチ方策の検討と試行が必要である。また、当館への親近感を醸成することでリピーターやファンの獲得、事業運営の協働者の獲得へ繋げる効果があると考えられる。

【成果】従来の『博物館だより』を『なじよな』としてリニューアルした。印刷形態を変更し、内容もよりくだけたものにするすることで、博物館の敷居を下げ、親しみを感じてもらえる広報誌となった。加えて、ラジオ番組で学芸員が生声を届けたり、『なじよな』や YouTube に「殿様」「南蛮先生」「忍者」といったキャラクターが登場するなど、様々な取り組みを行うことで親しみやすさと認知度を向上させてきた。また、シンボルマークの活用を意識づけたほか、三の丸からプロジェクトのロゴを制作・活用して掲示物や広報物の統一感を計ることで、認知度の向上につなげることができた。

【課題】広報誌のリニューアルや様々なメディアの活用によって親しみやすさを向上させた一方、広報物や掲示物のデザイン統一については一定の成果に留まった。『なじよな』はデザインを踏襲することでイメージを固めていくことができたが、各分野の講座や各班担当のイベントのチラシ等については、イメージを統一するための明確な方針を打ち出すことができなかった。一方で、今期中にも当館の活動が従来よりも多岐にわたって展開されてきたことを受け、どこまでイメージの統一を図るべきか、多様なデザインで各事業の特色を打ち出す方がよいのではないかという議論もあった。

#### ◆活動方針 7 地域連携とネットワークの拠点

重点目標⑮	実現方策
県内の各機関・団体との連携による新たな文化活動の創造	当館が県内の文化ネットワークの拠点の一つとしてより効果的に機能することで、既存の連携の活性化や、新たなネットワークを構築する。それらを基盤に、博物館の文化資源を活用し、観光地・会津に立地する特性を活かして、新しい文化活動を創造する。

〈目標設定の背景〉

県内の文化施設間では、十分な連携体制の構築や事業の実施が行われているとは言えず、また観光団体等との新たな連携の構築も可能性として残されたままである。既存のネットワークの強化や、新たな枠組み

の検討により、県内の文化的ネットワークの拠点たるべき当館の役割の実現が望まれる。連携の基盤の上にこそ、新たな文化活動の創造が可能であると考えられる。また、観光地・会津に立地する当館の特性を活かした取り組みも検討したい。

【成果】当館が事務局をつとめる福島県博物館連絡協議会において、会員の研修など事業内容の充実に取り組み、連携を強化した。

令和2年度には「会津の文化×地域振興プロジェクト」協議会（会津若松市、会津若松観光ビューロー、会津若松商工会議所、当館）を母体に、連携先に只見川電源流域振興協議会、福島県観光物産協会交流協会を加え「福島県立博物館を活用した会津文化観光拠点計画」を策定、「三の丸からプロジェクト」をスタートし、博物館や地域の有する文化資源を観光資源として活用していく取り組みを始めた。三の丸からプロジェクトを基盤に、会津若松市内の歴史的建造物での連携展示やイベントの開催、博物館や史跡をユニークベニューとして活用した事業など、これまでにない新しい文化活動を創出した。

【課題】「会津の文化×地域振興プロジェクト」協議会はこれまで博物館の展示をベースとした観光事業との連携を中心として行ってきたが、今後はこれまで連携できていなかった商工業、宿泊業、交通業との連携も視野に入れ、より地域振興に寄与できる体制を構築していく必要がある。三の丸からプロジェクトは共同申請者との協議のもと自走体制構築をめざす。

#### ◆活動方針8 震災遺産の保全・活用による東日本大震災の共有と継承

重点目標⑩	実現方策
震災遺産の展示公開と利活用	年間を通して観覧できるように、震災遺産を常設展示する。博物館資料「震災遺産類」の保存・活用に向けて、核となる職員を配置した新分野を確立する。

〈目標設定の背景〉

第2期中期目標においては、被災地域の博物館施設などと連携しながら震災遺産を2,000件以上収集し、大規模な新規資料収集を達成した。震災遺産は、既存の博物館資料（民俗資料類、歴史資料類、自然標本類）に分類される性格をもちつつも、「東日本大震災」に関連する震災遺産が多数収集されたため、他と区別するために博物館資料に「震災遺産類」が追加された。震災遺産の管理、収集、活用を主担当とする分野の設置には至らなかったが、核となる職員を採用した。

第3期中期目標では、震災経験の共有と継承を促進するために、分野確立、震災遺産の保全を継続しつつ活用に重点を置いて、常設展および企画展で公開する。

【成果】令和3年度に災害分野をスタートさせた。

企画展を実施し、調査研究の成果として図録を編集した。図録の内容は資料紹介だけでなく記録誌として利活用できるものとした。

震災遺産を活用しながらの防災講座は社会的なニーズと合致しゲストティーチャー事業等での対応に繋がっている。また、震災遺産をメタバース上で利用する共同研究も実施した。(国土交通省 国土地理院による公募「令和3年度 3次元点群データ利活用に係る実証」)

運営協議会でたびたび指摘された館外での展示についても、博物館資料展示活用のアウトリーチ事業を整備し令和4年度には2会場で実施した。

【課題】常設展示については、令和6年度の休館期間に行うこととして延期となった。また資料整理については、十分な作業ができていないとはいえず、収蔵場所も不確定のままとなっている。

#### ◆活動方針9 新たな博物館の役割・機能の創出

重点目標⑩	実現方策
地域社会の現状への貢献	これまでの博物館活動の蓄積、博物館の可能性を活かしながら、多様性に対応した博物館であることを意識した博物館活動により、博物館の新たな役割・機能を拡張する。博物館ならではの手法で、過疎化、高齢化等地域が抱える課題に向き合い、地域社会の未来に寄与する博物館活動を試行・実施する。

〈目標設定の背景〉

社会の多様性への対応が求められる中、博物館機能を社会に拓き、来館者に限らない様々な層の方が博物館を利活用できる仕組みづくりが必要である。

【成果】ライフミュージアムネットワーク事業、ポリフォニックミュージアム事業を基盤に、ソーシャルインクルージョンをテーマとしたディスカッションやリサーチを重ね、障がいのある方によるミュージアムの利活用の課題を検証し、障がい者、高齢者等との博物館資料を活用したプログラムを実践した。

地域の方、地域の文化施設、アーティストや研究者と連携し、地域が抱える社会的課題に向き合うプログラムや事業を、課題を検証しながら継続した。関係者がネットワークを形成し、それぞれの専門性を活かしながらノウハウを共有した。

令和4年の博物館法が改正や第26回 ICOM (国際博物館会議) 大会 (令和4年開催) によって、博物館は地域の社会課題に向き合い、包摂性をもった施設であることが定められたが、当館ではそれに先立ち活動してきた蓄積を活かし、近年新たに求められている博物館の役割に対応

を続けている。

【課題】実践を通してノウハウを得てきたが、地域が抱える社会課題に対しての知識や経験は不十分であり、今後も継続した学びの場を設けていく必要がある。地域社会への貢献は博物館単体ではなく、地域の多様な主体との協働が不可欠であり、協働体制の構築とともに、会津地域以外への横展開の連携協働もより強化していく必要がある。

#### ◆活動方針 10 管理運営

重点目標⑩	実現方策
施設の安全で快適な環境整備	入館者が安全で快適に利用できるように、施設・設備の点検結果に基づいて、危険箇所・不良箇所を改修するなど、適正な施設の維持管理に努める。バックヤードに耐震対策を施し、利用者及び職員の安全を確保する。

〈目標設定の背景〉

・現在の建物は、昭和 61 年 3 月の竣工から 33 年が経過し、施設・設備が老朽化しており、またバックヤードの耐震対策が十分に行われていないことから、入館者及び職員等の安全・安心を確保するため、目標を掲げて実現に向けた取り組みを行う。

・博物館のバックヤードでは、ボランティアの活動やバックヤードツアーへの参加等、通常一般に開放していない場所での活動が増えている現状がある。安全確保や安否確認の方法などの検討が必要である。

【成果】地震災害時対応（緊急時の行動指針）を作成し、災害発生時に都度共有するようにしている。また館内の危険個所の把握も進め、事務室や研究室等の棚上等の整理を進め防災的な意識を持つようになった。図書室では書棚棚板に図書落下防止テープ等を貼り被害防止対応を始めた。ヘルメット等も収蔵庫扉付近等及び館内の常に目にできる場所に配置した。

【課題】

令和 6 年 1 月に発生した能登半島地震の場合のように、長期休暇中などと重なり災害対応が難しいケースも発生する。地震対応については対策が進められているが、優先順位等をつけながら集中的に課題解決に取り組む必要がある。

令和 6 年 2 月に発生した総合展示室排煙窓の故障をできるだけ早く修復・復旧することが直面する課題であり、さらに館全体の総点検を実施し、長期的な展望に立った建物の修繕計画等を立てていく必要にも迫られている。

### 3 数値目標の成果と課題

区 分	令和元 実績	令和2 実績	令和3 実績	令和4 実績	令和5 実績	合計 (平均)
目標 (人数)	90,000	90,000	90,000	105,500	116,500	492,000
年間利用者数 (人数)	127,129	65,632	90,471	188,323	96,274	567,829 (113,565.8)

【成果】目標値は、当初は年間9万人であったが、中間見直し（令和3（2021）年度）において、「福島県総合計画」等と整合させて変更した。実績値については、年度によって変動があり、とくに令和2（2022）年度以後はコロナ禍の影響を受けることが多かったが、5年間の合計は目標値の合計を上回るようになった。

また中間見直しにおいて利用者数の集計方法が変更され、「利用者」の内容を従来の展示の観覧者や行事の参加者のみに限定せず、近年の当館における活動の実情に合わせて、より幅広く捉えるようにし、当館の利用度を示す指標としてふさわしいものに近づけるようになった。「三の丸からプロジェクト」や「博物館資料展示活用アウトリーチ事業」等の今期中に始まった事業による利用者についても一部反映させることができるようになった。

【課題】利用者数の対象は広くなったものの、それぞれの事業において一定の利用者数を保ち続けることは、変わらず求められている。館全体の活動のバランスを保ちながら、個別の事業をそれぞれ充実させながら利用度を高めていくことが今後も必要である。

主要な柱のひとつである企画展については、かりに集客の人数だけを問題にするならば、実行委員会方式か否かによって結果のちがいが大きく表れるケースが多いこと等をふまえて、各年あるいは数年を見通して利用者数がコンスタントに安定させられるような展示計画を組むことが課題である。

区 分	年間 目標	令和元 実績	令和2 実績	令和3 実績	令和4 実績	令和5 実績	合計 (平均)
資料情報の 公開 (件数)	5,000	2,054	3,245	2,819	6,768	13,393	28,279 (5655.8)

【成果】一次資料の登録データに基づき、広く Web 上での資料情報の公開を進めた。館として年間 5,000 件の登録件数目標は、前半では未達成が続いたものの 4～5 年目にかけて遅れを取り戻し、5 年間での Web 上での公開資料点数の総計 28,279 点（1 年あたりの平均 5,656 件）と目標を達成した。

【課題】資料情報公開の前提として、分野ごとの収蔵資料のデータベース I.B.Museum 上での登録は必須であり、多忙化する学芸業務の中にあっても、資料の整理・登録をコンスタントに進めることの重要性は揺るがない。進捗管理を今後も行いつつ、広く県民の公的財産たる当館資料の情報公開を推進することが重要であり、不断の努力を要する。

区 分	年間 目標	令和元 実績	令和2 実績	令和3 実績	令和4 実績	令和5 実績	合計 (平均)
研究成果の 公表 (件 数)	30	32	15	34	28	30	139 (27.8)

【成果】年間目標としての 30 件は、年度ごとの平均では目標に達しえなかった。これは特に令和 2 年度の実績の少なさによる。コロナ禍当初の緊急事態宣言等により、各学会で年次大会等の開催中止が相次ぎ、研究成果の発表機会が減少した結果と考えられる。なお、令和 3 年度以降はオンラインによる発表機会も増えたことから、令和 2 年度を除けば、平均として目標をほぼ達成している。

【課題】資料情報の公開と同様に、多忙化する学芸業務の中にあっても地道な研究の蓄積は個々の学芸員の活動の基盤であり、研究成果の公表について不断の努力を要する。（※重点目標「④多様な連携による新たな研究活動」も参照）

区 分	年間 目標	令和元 実績	令和2 実績	令和3 実績	令和4 実績	令和5 実績	合計 (平均)
行事の実施 (回数)	100	130	77	111	137	105	560 (112)

【成果】行事の実施回数について、新型コロナウイルス感染症の流行が始まりイベントの実施が制限された2020年を除いては、目標値の100回をクリアしている。各分野が多様なイベントを企画し実施したほか、三の丸からプロジェクトによる体験型事業など、今期中に新たにスタートしたイベントも来館者から認知され参加者を集めている。

【課題】一方で、行事の実施希望日が夏から秋にかけての土日祝日に固まる傾向があり、行事数の増加とともに日程の調整が難しくなっている。年間の土日祝日数は年度にもよるが110～120日であり、一年を通じてほぼ全ての土日祝日に行事が入っている計算になる。学芸員の業務量の増加もあり、適切な行事实施回数を検討する必要も生じている。

区 分	年間 目標	令和元 実績	令和2 実績	令和3 実績	令和4 実績	令和5 実績	合計 (平均)
ホームページ (アクセス 件数)	430,000	391,990	304,261	368,789	485,372	359,790	1,910,202 (382,040.4)

【成果】ホームページへのアクセス件数については、今期中に目標値を達成したのは2022年度のみとなった。当該年度は夏の企画展として「新選組展2022」が開催されており入館者数も多かったことから、企画展への関心の高さがホームページのアクセス数につながったと考えられる。

【課題】アクセス数の増減は実際の来館者数の増減と比例しており、館内事業利用者数から推定すると、利用者数目標値に対してホームページ目標値は370,000～380,000件程度が妥当と考えられる。今期の実績を踏まえて目標値を修正する必要があるが、ホームページ閲覧数は企画展の注目度や入館者数に左右されるため、単独で目標値を設定する必要があるのか検討すべきと考えられる。

区 分	年間 目標	令和元 実績	令和2 実績	令和3 実績	令和4 実績	令和5 実績	合計 (平均)
館外事業利 用者数 (実行委員 会・協議会 事業等)	500	547	59	231	150	237	1,224 (244.8)

【成果】令和元年度はライフミュージアムネットワーク実行委員会の事業において、地域の社会課題等を考えるトークイベントを積極的に館外で行い、多くの方にご参加いただいた。2020年、2021年も継続してライフミュージアムネットワーク事業を行い、コロナ禍や事業内容の変化に伴い利用者数は減少したが、館外とのネットワークの構築により博物館機能の強化につながった。また、磐梯山ジオパーク事業、ふくしまサイエンスぷらっとフォーム事業においては、継続することによりコンスタントな利用者数を得ることができている。

【課題】実行委員会事業は事業の性格により、参加者が多く見込めるものと見込めないものがある。また補助事業の場合、助成を得られない場合は事業自体を実施することができなくなるため、利用者数に大きく影響する。変動の可能性が高い事業に対して、5年間を通じた目標値を設定することに難しさがあり、目標の設定方法を再検討する必要があると感じる。